

## 【自立って何だろう？】

中学部教諭

みなさんは、生徒用の玄関の入り口付近に、大きな石碑があるのを知っていますか？

そこには大きな文字で「自立」と刻まれています。そして、裏にはこう書かれています。

「自立に向けて 努力は自信をうみ 感謝は和をもたらし 誠実はともに生きる道をひらく」。この言葉は、体育館の壁面にも額に入れて飾られていますね。岡崎盲学校の「校訓」です。

みなさんは、この「自立」という言葉をどう考えますか？ 今はやりのチャット GPT に「自立って何ですか？」と質問してみました。すると、こう返ってきました。「自立とは、他人に過度に頼らず、自分の力で考え、判断し、行動し、生活していくこと」だそうです。

この文章の「過度に頼らず」という一節が、とても重要だと思います。つまり、自立とは、「だれにも頼らずに」ではなく「必要なときに助けを求められることも自立」という解釈です。

だいぶ前になりますが、横浜で行われた研究大会で、小出 進さんという特別支援教育で有名な先生のお話を聞く機会がありました。とても印象的なお話でしたので、少し紹介しますね。



『真に自立的でたくましい生活力をもった人間像として、私たちはロビンソン・クルーソーを頭に描きます。離れ小島について、一人で小屋を建て、食べ物を捜して意欲的に生活し続けた姿です。反対に生活力の乏しい人の像として、やや無能な若殿を思い浮かべます。世話をされ、面倒を見られる生活に終始し、詩を詠むことはできても自力で生活処理できない人の姿です。

かつてこのような子どもたちが、「山の手タイプ」と「下町タイプ」に分けられたことがありました。山の手タイプの子どもは、インテリで理屈が達者だけれども実際的な生活力に欠け、下町タイプはそれとは対照的だということです。

自立的な生活力に欠けるのは、自立的に生活する経験が不足したからです。だから、自立的な力を高めるためには、自立的に生活する経験を積み重ねることが大切なのです。自立的に生活する経験を多くすることになれば、家庭や学校での生活が「若殿の生活」ではなく「町人の生活」でなければなりません。』

このお話を受けて、私は「自立的な生活」というのを「最小限の援助を受けて最大限の力を発揮すること」ととらえました。こう考えれば、目の前にいるどの児童・生徒にも、個々の段階に応じた、「自立的な生活」というものが必ずあるはずだと思ったのです。

よく人は、自分の目標を山の頂上に例えます。「頂(いただき)を目指す」など。私は、文化祭明けの休日に、富士山をぐるっと一周、バイクで走ってきました。久しぶりに見る富士山は本当に雄大でした。もちろん、日本一の山ですよ。

走りながら眺めていて感じたことは、富士山はとても裾野が広く大きいということです。高い山になればなるほど、裾野という土台は大きくならなければなりません。ツーリングの最中には、樹齢何百年という巨木にも出会いますが、高く大きな木ほど、地面の中に深く広く、根をはらなければなりません。

自立という頂を目指すならば、その土台となる、知識であったり、常識であったり、礼儀であったり、技術であったり、言葉遣いであったり、態度であったり・・・、そういった基本的な部分の積み重ね、経験の積み重ねがとても重要になってくると思います。

この「経験」について、もう少し深掘りすると、「実地的な経験」でなければ意味がないと感じています。特にそれを強く感じるのが、買い物の場面です。計算は得意で、紙面上のお金の計算はできるのに、実際の買い物で困っている生徒をよく見かけました。

学校では、よく教室で買い物の学習をします。先生がレジの係になって生徒に物を買わせるのです。これとこれを買ったらいくらになるかと問います。「なすとピーマンを下さい」という具合に……。しかし、実際のスーパーやコンビニでは、欲しいものをカゴに次々に入れて、レジでピッピッとやります。実際に必要な力は「これだけ買ったら大体いくらぐらいになって、財布の中身で足りそうなのか？財布の中のどのお金を出せばよいのか？」という「だいたいの力」です。このような力は、いくら教室の中で教えようとしても、なかなか身につくものではありません。是非、実地的な経験を多く積み重ねてほしいと思います。

私は、舎監をしています。舎生の皆さんは、小学部であろうとも、自分で洗濯をし、部屋で干して畳み、部屋や当番の掃除をし、自分の持ち物の管理を自分たちでしています。食事のときは、自分たちでお茶を注ぎ、テーブルを拭き、食べた食器は自分たちで片づけます。食事の時間、点呼の時間、朝礼の時間、入浴の時間など、時間をすごく意識して計画的に行動しています。舎生の皆さんは、ものすごく大切な経験を積み重ね、生きる力を身につけていっているなど強く感じます。



小学部のふれあい発見推進事業や中学部のチャレンジ体験、高等部の産業現場等における実習なども、実地的な体験をするチャンスですね。

学校に通っている今だからこそ、「それぞれの自立」に向けて、裾野を広げ、深く広く根を広げてほしいと願います。

# 【 宝 島 】

高等部理療科教諭

先日1月12日、毎年のように「成人の日」がやってきました。成人を迎えた方、まだ成人になっていない方、それぞれに「成人」に対する思いや関心は違うでしょう。そして私の「成人の日」を思い出してみると、病院での実習中で、週明けに提出するレポートと実習日誌の作成に追い詰められていました。実習先の指導教官はとても厳しかったので、成人式に出席しても「早く帰ってレポートを完成させなくては」という焦る気持ちがいっぱい、それほど大きな感動はありませんでした。世の中ではちょうど湾岸戦争が始まったという歴史的なニュースがあり、成人式では舛添 要一(※1)さんが「もっと世の中に関心をもって、社会に貢献する大人になるように」とかなり強い口調で話していたことが印象に残っています。



さて、今回は専攻科理療科に入学して進路選択に迷う出来事の一つを書いてみたいと思います。

## 19. スポーツトレーナー①

まず最初に、私が在学していた筑波大学附属視覚特別支援学校(以下附属と略します)の理療科における当時の進路について、簡単に説明します。

進学と就職の大きく2つに分けられます。進学先として、筑波大学理療科教

員養成施設、附属の理学療法科、大学の3つが挙げられます。就職は、治療院、開業、その他と、3つが挙げられます。

就職の「その他」が、私の在学中最も注目される進路先になっていました。その背景として、これまで理療の免許を取得していれば就職できていた病院の求人が理学療法士に代わり始めたこと、大規模な治療院が少なくなってきたこと、進学先として最も多くの受験生が目指していた理療科教員養成施設に何度受験しても合格できない人が増えていたこと、などが考えられます。また同時に、先生方が理療師の進路先を求めて、新たな就労先を開拓し始めたことも挙げられます。いろいろな人がアイデアを出し合い、開拓に乗り出しました。特に、ヘルスキーパーとスポーツトレーナーは先生方も力を入れておられました。「ヘルスキーパー」という言葉が生まれたのも、おそらくこの頃ではなかったかと思います。

私の同級生に、陸上短距離のパラリンピック選手がいました。ソウル大会に出場し、100mで10秒台のタイムを出しましたが、「世界の壁は厚い」と、出場に至るまでのエピソードを数多く話してくれました。その同級生は専攻科に初めて「陸上同好会」を作り、私たちにも陸上の楽しさを教えてくれました。この話については次の機会にしたいと思います。同級生は体育大学への進学を目指していましたが、視覚障がい者の進学を認めてもらえる大学が見つからず、普通科卒業後1年を経て理療科に入学してきました。自身がスポーツを極める目標から、理療の技術をスポーツ分野で役立てたいという目標に切り替え、日々の学習に取り組んでいました。そんな同級生に強い刺激を受け、私たちもいろいろなアイデアを考えるようになりました。先生方も新たな進路先として、スポーツトレーナーを考えておられたようで、さまざまな取組が進められていました。

その一つは、東京で行われるテニスの世界大会でトレーナーを務める取り組みでした。具体的には、試合後の選手に対するクールダウンのマッサージを行

うことでした。当時メジャーな選手といえば、ボリス・ベッカー、マイケル・チャン、シュテフィ・グラフ、松岡 修造などでした。運が良ければこれらの選手にマッサージできるとのことでした。残念ながら私たち生徒は技術がまだ未熟だということで、先生方の施術を見学させていただくことしかできませんでした。先生方ですら、松岡選手などのように専属のトレーナーがいる選手には施術ができませんでした。しかし貴重な体験として、プロ選手の筋肉に直接触れることができました。ゴリゴリのマッチョな筋肉だと思っていたのですが、非常に柔軟性のある柔らかな筋肉でした。

私たちもまだトレーナーが確立されていなさそうなスポーツについて、考えていました。その一つに、格闘技の選手に対する施術がありました。格闘技は私も小学部のときに寄宿舍で友人や舎監の先生とプロレスごっこを通して、四の字固め、コブラツイスト、ウエスタンリアットなどの技をかけあっていたので、とてもよいアイデアだと思いました。他のスポーツに比べると、肉体の疲労が大きいいため私たちの施術が疲労回復には適しているだろうと考えたからです。さっそく先生に相談したところ、当時議員を務めておられたアントニオ 猪木(※2)さんに会って私たちの考えを説明してはどうかという助言をいただきました。プロレス界では大きな影響力をもっていることや政治家に関心をもっていたことで今後の就労に強く影響するかもしれないという考えから、アントニオ 猪木さんを思いついたとのことでした。

実際にお会いしてみると、プロレスラーというイメージとは少し違っていました。アント



ニオ 猪木さんは、非常に真摯な態度で私たちの話を聞いてくださいました。そして、私たちの施術も受けてくださいました。私のイメージでは、「マッチョな筋肉、鉄のような体、近くにいるだけですごい圧力を感じる」などでしたが、私たちよりも少し大きな体で、軟らかい筋肉、思ったよりも普通の人という印象でした。残念ながら、プロレスラーはお互いにマッサージなどを行い、疲労回復や故障に対する対応を行っているとのことでした。格闘家の多くが何らかの手技療法を行うことができるため、トレーナーは必要ないことを説明してくださいました。そのお話の中で、私に「こんな風にやるんだよ」と、首の骨をバキバキと矯正する技を披露してくださいました。なんの前触れもなく訪れた経験に、私は「プロレスラーに頭をつかまれて、あっという間に首をひねられれば、気を失ってしまうかも…」という強い恐怖でいっぱいになりましたが、まさにあっという間に、何の問題もなくその施術は終わりました。

それから先生方は、私たちのためにトレーナーの仕事内容や求められるスキルについて学習できる機会を設けてくださいました。私はこの経験から希望する進路を実現するためには、自分でも調べたり、アイデアを考えたり、行動したりすることが大切であることを学びました。たまたま行動的な同級生が身近にいたことがこれまでに例のなかった取組へと繋がったのですが、陸上同好会を作ったり、目指す進路先を先生に相談したりするなどの行動は、私にとって本当に良い勉強になりました。次は、プロ野球選手の宿舎に訪問し、トレーナーの仕事内容や選手施術体験をしたことについて書いてみたいと思います。

※1 舩添 要一 … 政治評論家。第19代東京都知事。

※2 アントニオ 猪木 … プロレスラー。政治家。2022年に死没されました。

# 【AI がもたらす視覚障がい者の未来の仕事】

進路指導主事

昨今、さまざまな AI (人工知能) 技術の進化を身近に感じる機会が増えました。自動車は視覚機能を持ち始め、中国やアメリカでは一般公道での無人タクシー営業がすでに一部地域で行われています。また、音声認識技術の向上や歩行支援機器の実用化など、以前は頼りなかった視覚障がい者向けの支援技術もかなり精度を高めてきています。

そして、より私たちに身近な分野としては、スマートフォンやパソコンを使った対話型生成 AI の利用があります。前号の DREAM で紹介した挿絵の制作や文章校正、データ整理など教育現場でも活用できる場面が増えました。

一方で、AI が人間から一部の仕事を奪いつつあるという状況や、研究論文等を不正に AI に書かせるといった負の側面も報じられています。我が家の娘も学校の宿題で出される物理や数学の図形問題等をスマートフォンで撮影して AI に解答させる、という望ましくない使い方を覚え、陰で巧みに利用しているようです。



良くも悪しくも今後、さまざまな分野で AI が急速に活用されていくことは疑いのない状況です。それでは、視覚障がいのある方々に対して AI は将来的にどのように関わっていくのでしょうか。対話型生成 AI には、マイクロソフトの〈コパイロット〉、オープン AI の〈チャット GPT〉、グーグルの〈ジェミニ〉等がありますが、今回それらを使って、「AI がもたらす視覚障がい者の未来の仕事」というテーマで考察させてみました。その回答を要約して次のページに紹介します。(掲載しているイラストも対話型生成 AI が文面に合わせて制作したものです)

---

将来、AI 技術の進歩により、視覚に依存しない仕事の選択肢は広がり、視覚障がい者ができる仕事は多岐に渡る可能性があります。以下にいくつかの例を挙げますが、これらに限定されるものではありません。

#### ① 次世代端末を媒体としたデスクワーク

触覚グラフィックディスプレイや高機能スクリーンリーダー等を操り、製図や各種データ入力等の情報処理業務を行います。視覚に頼らない新しいインターフェースが、デスクワークの可能性をこれまで以上に広げます。



#### ② 産業ロボットとの協働

音声コマンドによる各種ロボット操作を実現し、製造や物流などの業務を効率よく遂行します。トラブルや障害発生時には、システムが即座に音声や振動でエラーを通知し、視覚障がい者の迅速な対応を可能にします。



#### ③ リモートによる各種サポート業務

遠隔教育やカウンセリングなどのオンライン上の支援業務は、音声操作中心で行えるようになります。パソコン上でのイベント運営等についても障がいに対応した機器を使用することで、誰もが参加できる新しい体験を提供します。



#### ④ 情報取得や移動の自立性向上

AI スマートグラスや自動運転車などの様々な視覚支援機器により、交通情報の収集や移動が容易になります。視覚障がい者にとって、これまで難しいとされていた外出を伴う仕事の選択肢も大幅に広がります。



---

これら AI の考察は決して遠い未来の夢物語ではなく、すでに世界中の研究現場で試作品が造られ、実用化された技術も広がってきているようです。AI と障がい者の協働は、単なる支援の枠を超え、仕事の方法や人々の意識も大きく変えようとしています。

現在、視覚障がい者の雇用については、少しずつ増えてはいるものの、まだ厳しい状況にあるといえます。厚生労働省の報告では、昨年度の民間企業における全ての障がい者雇用数は約67万7千人。そのうち視覚障がい者の雇用数は約1万4千人と障がい者雇用全体の2%にとどまっています。

しかし、今後ますます AI 技術が進化し、視覚に頼らないコンピュータの普及や無人運転技術等の精度が上がれば、視覚に障がいがある方も個々がもつ能力を発揮して活躍できる仕事は確実に増えていきます。

これは理療科生徒が目指すマッサージ・はり・きゅうの分野でも無関係ではありません。カルテの記入や紙資料の内容把握、通勤や訪問マッサージでの移動など、現在ネックになっている問題も近い将来にクリアできるかもしれません。そして、このことは就職だけでなく大学等への進学や福祉施設利用においても同様のことが言えます。



AI の進化は私たちの生活に大きな変化や可能性をもたらします。ただし、その影響で淘汰される視覚障がい者の仕事もあるかもしれません。移り変わる社会の中で、AI 技術の進歩に頼るだけでなく、自己の努力とスキルの習得はいつの時代においても不可欠です。学生の今、自分にできることを精一杯行い、目標をもって日々の生活を送ることが、就職・進学・福祉施設利用を問わず、未来の選択肢の幅を大きく広げることにつながります。